

令和元年6月20日現在

機関番号：34412

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02347

研究課題名(和文) 文学テキストを基盤としたthinking skills涵養型英語教育モデルの構築

研究課題名(英文) A Study of Cultivation of Critical Thinking through Reading Literary Texts in the EFL Classroom

研究代表者

杉村 寛子 (Sugimura, Hiroko)

大阪電気通信大学・共通教育機構・教授

研究者番号：20411267

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：大学の英語教育において、四技能に加え、クリティカル・シンキングを主とする思考力を涵養する機会を設けるために、教材としての文学テキストについて再検討を試み、思考を構成する細目を文献研究によって整理することが本研究の主な目的である。加えて、試行授業を実施し、具体的にその方法論を探った。参考とするために、諸外国のクリティカル・シンキングに関する教育状況を見聞したいと考え、英国の教育機関に協力を求め、視察および試行授業も行なうことができた。以上を統括して、文学テキストがクリティカル・シンキングの涵養に資する可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、大学における英語教育に思考(特に、クリティカル・シンキング)の涵養という到達目標を組み込む足がかりとなった。文学テキストを教育的目的から使用することの意義を検討し、再確認できたことで、今後の文学研究自体の発展にもつながる。

研究成果の概要(英文)：This study explores how literary texts function to cultivate reasoning skills (critical thinking, among other things), and how they should be used in English education for the above-mentioned purpose. For the former, both the literature- and reasoning skills-related books and articles were read to build a theoretical framework and to select literary texts as materials; for the latter, how the texts should help students in English classes to improve their critical perspectives were examined. Furthermore, fieldwork was conducted in the UK to find out what is difficult for Japanese university students to interpret literary texts. Based on the results of some pilot lessons, the fieldwork in the UK, and the literature reviews, we showed the possibility of employing literary texts as catalysts for thought in EFL classroom.

研究分野：英文学

キーワード：文学 思考力 クリティカルシンキング 英語教育

1. 研究開始当初の背景

現在、大学における英語教育は、何度目かの転換期を迎えていると言えよう。グローバリズムの影響の下、国際社会で通用する人間、すなわち所与の問題について根拠に基づき、論理的に自分の意見を述べることで育つことができる人間を育てることが英語教育の目標のひとつとなりつつあるならば、今後英語教育のモデルは、従来からの四技能の涵養に加え、論理性を伴う思考を鍛える目的も含めた上で、検討されなければならないであろう。

そこでまず長らく大学において教室から締め出される傾向にあった文学テキストを、思考の涵養という観点から、教材として見直してみたいと考えた。その契機のひとつは、英国バンガー大学日本研究所によるトリニティ・ファウンデーション・プログラムで実践されている詩を教材とする授業の視察であった。そこでは詩について自分の意見を述べる際に、なぜそのように考えたのか、言語を基盤として説明することが徹底して求められていた。これは、すでに **Leech and Short** による著書 *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose (2007)* にも詳述されているように、文学テキストを読む過程で生じる印象や感情的な反応の根拠を、読者はテキストの中に探し求め、説明しようとする認知的な側面に合致するものであった。しかし、**Rosenblatt** によると、文学テキストを読む際に、読者の中に生起している過程は、上述のような言語による論理的検証だけではない。文学テキストと読者は常に有機的に結びつけられており、読者のそれまでに習得した知識や経験が読む都度に深く関わっていき、文学テキストの解釈に関わる変数として機能しているからである。

また **Widdowson** や **Gajdusek** によれば、文学テキストを特徴づけるもうひとつの性質は、論説文などとは異なり、はじめに読者に対して明確なコンテキストを示していないことである。そのため読者は、テキストを読み進める中でコンテキストを随時構築し、修正し、最終的に一貫性のある意味を作り上げていくという認知的な過程を経験する。つまり、まさにこの過程が思考そのものである。文学テキストは単になんらかの情報を提供するだけでなく、自己の思考についても併せて思考させ、同じテキストを何度もたどらせるという再読性を持つ。このように読者の認知的能力を高める可能性を持つということも、文学テキストの特徴のひとつであることをここに確認しておきたい。

一方で、思考（ここでは主にクリティカル・シンキングに重点を置く）に関しては、とりわけ高等教育機関ではその重要性が強く意識されつつも、大学入学以前においてはもちろんのこと、大学入学後も体系的な教育実践が徹底されているとは未だ言いがたい。この意味においても大学教育の入り口に位置する英語教育は恰好の機会である。再びここに、思考を促す性質を持つと考えられる文学テキストを取り込み、読むことを通した思考の習慣化を図りたいと考えた。

2. 研究の目的

確かに、英語教育において文学テキストを用いた事例研究は数多く見られる。しかし、クリティカル・シンキングの涵養を目的に含めた研究に関するかぎり、これからまだ多くの議論が期待される場所である。

本研究は、思考に関する文献渉猟を行ない、クリティカル・シンキングを構成する細目を検討し、整理することを第一の目的に据える。続いて、この細目を参考にしつつ、具体的にどのような文学テキストが教材として妥当と考えられるか、同じく文献研究を通して考察したい。このようにして選び出された文学テキストを基に、クリティカル・シンキングの導入を目的とする教材を開発する。最後に、この教材を用いた試行授業を通して、方法論を検討し、本研究期間を区切りとして一定の結論を出す。

3. 研究の方法

(1) 文献研究

主な哲学者や教育学者によるクリティカル・シンキングについての種々の定義を理解した上で、英国の **Examination Board** のうち、主に **OCR (Oxford, Cambridge and the Royal Society of Arts Examinations)** や **AQA (Assessment and Qualifications Alliance)** におけるクリティカル・シンキングに関する研究書などを読み、思考に関する理論の枠組みを確立していく。さらにもうひとつの重要な理論の枠組みとなる文学テキストの読者モデルを文献渉猟により整理し、構築を試みる。教材となる文学テキストに関しては、クリティカル・シンキングの涵養を目的とした事例研究から、実際に使用されているテキストを探っていく。

(2) テキスト選定・発問開発

高等教育機関において観察される文学を専門としない大学生（読者）の実態を踏まえ、どのような文学テキストが思考を刺激し、促す傾向にあるか、またその涵養の端緒となるかを探る。さらに実際に選んだ文学テキストに基づき推論発問を開発する。

(3) 試行授業・分析

(2) で得られた教材を用いて試行授業を行ない、事前事後で思考を含め、いくつかの点でどのような意識の変化が学習者に生じたかについて調査を行ない、分析をする。そして、分析結果を(2)に還元し、発問の改良につなげる。

(4) 英国教育機関視察

英国バンガー大学日本研究所の協力を得、文学テキスト(ここでは主に詩)を用いた英語教育について意見交換を行ない、英国の思考に関する教育・評価や文学テキストの活用の有り様的一端を探る。

4. 研究成果

(1) 文献研究

研究開始初年度に V. Christina Bruns 著 *Why Literature?: The Value of Literary Reading and What It Means for Teaching* (2011) に併せて、J. Hillis Miller および Frank Lentricchia 等の文献を読み、一般に文学テキストを読む際に読者の中で生起している現象、すなわち Bruns の言うところの 'reflective reading' (クリティカル・シンキングにつながる読み方) の前提として、作品世界に感情移入する 'immersive reading' が伴うことを確認した。Miller においては対立するこの二つの読み方を、Bruns は Paul Ricoeur の解釈学を用いて統合している。このように想定された読者モデルは、Rosenblatt のイメージしたそれとほぼ重なる。

読者と文学テキストの有機的関わりが活発に起こるかどうかは、*Critical Thinking: An Introduction* (2011) において Alec Fisher が述べているように、ひとつに解釈を下す対象となる事象について、どれくらいの知識を有しているか、またどれくらいの可能性を「想像」できるかに掛かっていると言える。ここでクリティカル・シンキングに想像力が関わっていることが確認できたことで、John Dewey、Mary Warnock、Maxine Greene 等による想像力に関する研究書に手を広げるきっかけとなった。

OCR に関連する文献で挙げられていたクリティカル・シンキングを構成する細目のうち、本研究の目的に照らし、文学テキストを読む際に関係すると考えられるものを **assumption, bias, credibility of evidence, hypothetical reasoning, judgment** の 5 つに絞った。OCR 関連で取り上げられている主な教材の多くが非文学テキストであったため、文学テキストを読む過程に当てはまるものとして検討し直す必要があった。そこで研究開始当初の背景で言及した Rosenblatt の言う読者自らが持ち合わせている日常の経験や知識などのテキスト外情報を **assumption** や **bias** と関連づけた。さらに Leech and Short の言う言語を根拠とする過程を **credibility of evidence** に、読みの過程を通して、読者はコンテキスト構築し、修正をくり返すことから、この一連の思考を **hypothetical reasoning** と関連づけることにした。最終的に示される解釈は **judgment** とした。

教材とする文学テキストは、主に短編小説に的を絞った。Lawrence R. Sipe が *How Picture Books Work: A Semiotically Framed Theory of Text-picture relationships* (1998) および *Storytime: Young Children's Literary Understanding in the Classroom* (2008) において述べる絵本の特徴、すなわち読者による反復した読み ('reviewing' および 'reinterpreting') が可能であるという特徴が、テキストの短さゆえ、短編小説にも共通し備わっているからである。さらに短編小説は作者によることばの選択の精密性が高いと想定されることから、言語の分析に適していると言える。主に文学を専門としない大学生を対象としているため、テキストの長さに加え、解釈するために専門的な知識が大いに必要となるような類のテキストは避ける必要があった。Andy Young 等によると、大学においてすら、クリティカル・シンキングを促すには、テキストの敷居を下げる必要があり、暗示に富む子供向けの物語などを用いることには意義があると言われている。このことから、試行授業においては絵本や結末の解釈が分かれる物語も教材として組み入れた。

以上の文献研究から、文学テキストは語数の少ない(600 から 1200 語程度)扱われたテーマが身近な事柄でコンテキストを構築しやすいが、明確な結末を示していないものが好ましいと思われた。

(2) テキスト選定・発問開発

E. Hemingway の短編小説 'Cat in the Rain' を教材とした試行授業をくり返し、発問の作成・改良を徹底した。発問には主に登場人物の性格や人間関係についての推論、表象の解釈、言語表現の特徴の分析を含めた。いずれも全体を読んだ上で、メタレベルでテキストを読み直さなければ答えることのできないものである。また結末の解釈が読者に委ねられているため、続きを創作させる課題も加えた。

(1) の結果選び出された、その他いくつかの短編小説や子供向けに書かれた物語についても同様に発問を開発し、試行授業の結果を踏まえ、改良を加えた。一連のワークシートとして整えた。

(3) 試行授業・分析

2015 年度から最終年度までの 4 年間いくつかの短編小説を教材として、試行授業を行なった。まず試行授業を通して、文学を専門としない大学生の文学テキストへの反応についての調査を行なった。結末が曖昧なテキストであったにもかかわらず、それが自らの解釈の可能性を広げ、かつグループ・ディスカッションにより、他者の見解に触れる機会であったため、文学テキストに興味深く関心を示していることがわかった。しかし、他者の視点を意識することで自らの解釈をふり返り、発展させるところまで進んでほしいという期待に反して、実際はそこに至っていない状況が明らかになった。そこで、グループ・ディスカッションによってどのよ

うな形で意見を交わし、文学テキストの解釈に深まりと同時に広がりを持たせようとしているのか知るために、**David Hanauer** による‘The Task of Poetry Reading and Second Language Learning’ (2001)の実験プロトコルに従い、ICレコーダーを用いてグループごとにディスカッションの様態を録音することにした。文字起こしされたディスカッションのスク립トを精査し、同じく**Hanauer**の使用した九つのコードに加え、新たに五つのコードを設け(気づき、疑問、意見の提示、意見のくり返し、意見の反対、意見の発展、テキスト外の知識、意見とテキスト外の知識の統合、個人的コメント、以上**Hanauer**による / 確認、ディスカッション進行に関する発言、同調、事前課題の発表、(録音上の瑕疵による)不明瞭) カテゴリ分析を行なった。結果、最も期待された、および のカテゴリでは発言時間も短く、 については全グループでまったく見られなかった。これを踏まえ、発問を検討し、改良した。そして、2018年度に新しい発問を用いて同様の試行授業を行ない、録音スク립トを分析したところ、 、および に向上が見られた。さらに前回ではまったく観察されなかった の「意見とテキスト外の知識の統合」にも改善が認められた。

また学習者の所与のテキストについての解釈を観察する方法として、翻訳を取り入れた。**Susan Bassnett**によると、翻訳は、オリジナル・テキストの再読と書き換えの反復の結果産み出されたものである。翻訳に見られる登場人物の関係等についての解釈を既述の5つのクリティカル・シンキングの細目を用いて分析した。結果として、思い込みによる誤読が散見され、テキスト外の知識をテキストに関連づける際に、それが妥当かどうかの検討が十分なされていないことがわかった。これはそれまでの学習経験および習慣として、英文を読む際に、テキスト全体をメタレベルで見直す習慣、すなわち根拠として拾い出したテキストの各部分を論理的に統合し、一貫した解釈をしようとする習慣が身につけていないためと考えられる。

(4) 英国教育機関視察

英国バンガー大学日本研究所のトリニティ・ファウンデーション・プログラムにおける詩を用いた授業の視察では、英国人講師による発問に工夫が見られた。テキストを精読させ、そこから得た根拠を基に、詩に暗示されるメッセージを推論させていた。しかし、英語で書かれた詩に触れる機会がそれまでにほぼなかったと思われる日本人の大学生が詩を十分に理解するには、事前に詩のスタイルおよび読み方を理解しておく必要があると思われた。そこで、日本研究所と意見交換の上、2017年度に詩一般についての解説と、課題となっている詩についての補助教材の作成を行なうことになった。つぎに問題として認識されたのは、文学テキストについて自分の意見を述べる機会を持たなかった大学生から、意見を引き出すのが想像以上に難しかったことである。そこで、2018年度に、文学固有の表現に馴染ませ、文学テキストが多様な解釈に対して開かれていることを経験させる目的で、同じく補助教材を作成した。この教材では、コンテキストによる制限を幾ばくか軽減し、解釈の自由度を高め、意見を引き出しやすくするために、一、二文程度の文学的表現について考えさせるものである。

以上をそれぞれに、文学テキストがクリティカル・シンキングの涵養に資するものとして、学会発表および学術論文等で発表した。

それ以外に研究成果の一部(クリティカル・シンキングの観点から見た文学テキストの可能性、思考の一つとしての想像力、および思考を刺激するような形での文学テキストへのアプローチ)については、講演等を通して一般市民に公開した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 5 件)

(1) 杉村寛子・砂田恭美. 「思考を刺激する文学テキストのあり方 英国バンガー大学日本研究所トリニティ・ファウンデーション・プログラムの視察および実践報告」大阪電気通信大学人間科学研究 第21号, 2019年. 119-130. 査読有

(2) 杉村寛子・工藤多恵. 「短編小説'Cat in the Rain'についての大学生の解釈の分析」大阪電気通信大学人間科学研究 第20号, 2018年. 33-47. 査読有

(3) **Kudo, Tae and Hiroko Sugimura. 'Utilizing Literary Reading Text in English Reading Classes for Science Majors: A Pilot Lesson to Assess Effectiveness and Student Response' *Kwansei Gakuin University Humanities Reviews*, 23. 59-72. 2018年. 査読有**

(4) 杉村寛子. 「文学にある部屋」文学作品を通じた思考力の涵養を探る」岡山県高等学校教育研究会学校図書館部会年報 第53巻, 2017年. 21-33. 査読無

(5) 杉村寛子. 「なぜ文学か. 教育における文学テキストの可能性を探る」大阪電気通信大学人間科学研究 第18号, 2016年. 1-11. 査読有

[学会発表](計 9 件)

(1) 工藤多恵・杉村寛子. 「文学テキストの発展的な解釈を促すグループ・ディスカッションの

あり方を探る～ボイスレコーダーによる録音スクリプトの分析を通して～」JACET 関西支部
文学教育研究会，2019.2.23，同志社大学

(2) 工藤多恵・杉村寛子。「メディアとしての文学テキストはより深い思考を促すか～グループ・ディスカッションの分析から～」日本メディア英語学会，2018.10.21，東京学芸大学

(3) 杉村寛子。「シャーロットと教育」日本ブロンテ協会関西支部大会シンポジウム，2018.3.22，
神戸市立看護大学

(4) 杉村寛子。「E・ブロンテの『嵐が丘』の謎を解く」大阪電気通信大学公開教養講座，2018.3.8，
大阪電気通信大学

(5) 杉村寛子・工藤多恵。「文学テキストを用いた思考力涵養型英語教育に関する予備調査」The
56th JACET International Convention, 2017.8.31，青山学院大学

(6) 杉村寛子。「想像力の軌跡 シャーロット・ブロンテのビルドゥングスロマン」横浜市立大
学（日本ブロンテ協会協賛）エクステンション講座，2017.6.4，横浜市立大学（招待講演）

(7) 工藤多恵・杉村寛子。「思考力涵養型の英語教育への試み～‘Cat in the Rain’を用いた授業
実践報告」JACET 関西支部文学教育研究会，2017.2.25，同志社大学

(8) 杉村寛子。「文学のある部屋～文学作品を通じた思考力の涵養を探る～」第 53 回岡山県立
高等学校教育研究会学校図書館部会研究協議会，2017.1.25，ライフパーク倉敷（招待講演）

(9) Sheehan, Mark. ‘Language and Knowledge Within Reach: Using Graded Reader
Assignments to Foster Confidence, Increase Motivation, and Build Bridges to Course
Content.’ 公開シンポジウム「Literature and Language～文学を用いた英語教育最前線～」
2015.11.28，京都大学

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：工藤 多恵

ローマ字氏名：KUDO, Tae

所属研究機関：関西学院大学

部局名：理工学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：70342350

研究分担者氏名：南津 佳広

ローマ字氏名：MINAMITSU, Yoshihiro

所属研究機関：大阪電気通信大学

部局名：共通教育機構

職名：准教授

研究者番号（8桁）：70616292

研究分担者氏名：Mark Sheehan

ローマ字氏名：SHEEHAN, Mark

所属研究機関：阪南大学

部局名：国際コミュニケーション学部

職名：教授

研究者番号 (8 桁): **00411265**

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。